

ソフィア

京紙新聞文代会 謹

生来健康な22歳の女性が、1カ月前の抜歯後に体調を崩し、最近1週間で重篤化し、大学病院の集中治療室で死にひんする。数多くの検査は異常値だらけだが、どの医者にも診断がつかない。土壇場で

呼ばれた名医が「ウィルソン病（代謝異常のため銅が諸臓器に沈着する遺伝病）の急性増悪による肝不全と赤血球破壊」と診断。間一髪の肝移植で患者は何とか生還した。抜歯に対する抗生物質が悪く働いたようだ。まれな病気とこまめな症候の組み合わせ。これほどの難物は少ないが、医学の診断には不確実さが付きまとうものだ。『患者はだれでも物語る』の原作者の米国人医師リサ・サンタース先生は考える。だから本書の各章に、診断に悩んだ実例や誤診例が豊富に並ぶ。

松村 理司氏

349



まつむら・ただし 1948年大阪市生まれ。74年京都大学医学部卒。病院総合医。2013年から現職。著書に『“大リーガー医”に学ぶ』『地域医療は再生する』。

患者はだれでも物語る

患者は、医療の場では上手な話し手ではない。医学知識に乏しい。心身ともに悩んでいる最中である。意識がない

こともある。では医者が聞き上手かという点、それも心もとない。患者がしゃべり出すのを医者が遮ることはよくあ

る。患者のたった3秒の沈黙に耐えられない医者もいる。米国における身体診察の滅びの現状が描かれる。発展し続ける医療技術のクールさに比べて、身体診察は原始的で、押し付けがましい感じが否めないのだ。この技能は研修医時代にあまり伸びず、それ以降は退行することもある。とはいえ、身体診察を軽視したために重篤化した例は数え切れない。だから、技能の修得

法と取捨選択が鍵になる。米国に多いライム病の診断を例に検査は万能でないと説かれる。陽性ならある病気が絶対であり、陰性ならその病気が絶対でないという検査が存在し得ないのは、最近の新型出生前診断でもわかる。将棋では名人よりもコンピュータが優勢になりつつあるが、医学診断ではそうはいかない。名医の五感や一発診断、良医の傾聴や共感とコン

ピューターは無縁である。最終章は悲劇そのもの。自宅で発見された異状死体が病理解剖によっても診断できなかった事例が、サンタース先生の実の妹だったのだから。全体に歯ごたえのある内容だが、一般の読者層向けに書かれている。米国では一時期ベストセラーになった由だが、医学番組のテレビ報道にかかわった前歴のある先生ならではの庶民目線と筆先による。訳本を紹介させていただいた。我田引水の少ないことを監視者として祈りたい。
(医療法人沼和会総長)